［国際学部10周年記念シンポジウム］

世界の子供たちに教育を！

開催日時：2006年10月24日（火）　午後3時－5時
開催場所：敬愛大学国際学部図書館棟視聴覚室

［出席者］

黒田一雄氏（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）
伊藤解子氏（社団法人シャンティ国際ボランティア会：SVA）
平林国彦氏（ユニセフ東京事務所次席代表）

左から、平林氏、伊藤氏、黒田氏

講演1

国際教育開発の観点から

黒田　一雄*

今日は素晴らしい機会をいただきまして、ありがとうございます。私は教育開発という分野をこの十数年勉強し、なおかつ実践にも限られた範囲ですが、携わってきました。今日は「世界の子どもたちに教育を！」というテーマですので、どうして世界の子どもたちに教育が必要なのか、もしくはどういう違った考え方があるのか、ということをお話しさせていただきたいと思います。

世界には今、1億人以上の未就学児童がいると言われています。学齢期にもかかわらず、学校に行けていない児童がいるわけです。また成人の非識字者（字が読めない、書けない人たち）は8、9億人以上いると言われています。こういう人たちに教育を受けてもらうのは人権である、という考え方が、「世界の子どもたちに教育を」のいちばん分かりやすい理念だと思います。また、国際社会がどうして途上国の教育に取り組まなくてはいけないのかを考える時に、最も分かりやすい考え方は、この人権から考えていく考え方だと思います。

教育が人権であるという考え方は、古くからいろいろな哲学者が議論をしていますが、第二次世界大戦が終わってすぐの1948年に、国連で「世界人権宣言」が採択されて、そこでも、教育は人権である、特に初等教育は全ての人たちに対して無償で提供されないといけないということが高らか

＊黒田一雄氏　くろだ・かずお：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授（Kazuo Kuroda: Professor, Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University）

1966年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。スタンフォード大学大学院修士課程、コーネル大学大学院博士課程修了（Ph.D.)。アジア経済研究所開発スクール客員教授、ユネスコ国際教育計画研究所客員研究員などを歴任、広い分野で国際教育協力の政策形成・実践に携わる。編著に『国際教育開発論――理論と実践』（有斐閣）、共著に『開発と教育』（新評論）等。

に謳われて、そこに当時の世界の国々は賛同し署名しています。だから、教育が人権であるということが世界的な合意であるならば、世界は教育に取り組まないといけない、という仕組みになります。

しかしなぜ、教育は人権なのでしょうか。教育は人権であるという考え方は、その後も繰り返し、いろいろな国際会議や国際的な宣言で確認されています。多くの非政府組織（NGO）や国際機関のユニセフなどは、この「教育は人権である」という思いで途上国の教育に携わっているわけです。皆さんのなかで途上国と言われている所に行ったことのある人はどのぐらいいますか。アジア、アフリカ、ラテンアメリカに行っていない人は、イメージしにくいかもしれません。学校に行けない状態、もしくは字が読めないというのはどんな状態か。字が読めない人に会ったことのある人は、ほとんどいらっしゃらないと思います。子どもではなく、成人で字が読めない状況にある人は、非人権的な状況にあると言えます。例えば一生懸命農産物を作って、それを市場に持っていって売るとき、字が読めない、もしくは数字が数えられない、計算ができないというので大きな不利益を受けます。つまり自分がせっかく努力して作ったものを、そこで売ったりすることがきちんとできない状態で、だまされたりするのは非人権的ですね。もっと明らかな例は、例えば母親が子どもに薬をあげるのに、字が読めないので正確にどういうふうに薬を与えていいか分からない。それで子どもを死なせてしまうことも実際にあるわけです。文化はいろいろな国で違うのだと言っても、子どもが死んでしまうようなことは本当に非人権的な状況です。そういった状況を作りだしてしまう非識字の状態をなくすために、学校教育が必要だという考え方は、とても重要な考え方なのではないかと思います。

ほかにも例を挙げればきりがありません。教育がないことがどれだけ非人権的な状況を作ってしまうか。自分の人生とか社会のなかでの生き方、例えば民主主義などのシステムのなかで、自分の所属する社会のあり方を決めていくためにも、教育のある状態が必要なわけです。ですから、教育がないことによってそういったことに十分に参加できないのも、人権を剥奪

されているという状態になるわけです。国際社会が「途上国の子どもたちに教育を」という考え方で努力しているわけですが、教育は人権だという考え方はその最もベースにある考え方だと思います。

二つ目の考え方は、まさに教育が、途上国ないしは途上国社会の経済開発、社会開発のために有効な投資だという考え方です。つまり人的資源とか人的資本論だとか言うわけですが、教育を通じて人間の生産性、例えば農業や工業の生産性を上げて経済をよくしていく、もしくは社会的状況をよくしていく。そのために必要なものであるから教育に取り組む、という考え方です。これは開発の一つの道具として、もしくは投資という対象として教育を考えているわけです。人権的なアプローチと開発的なアプローチが、まったく違うというわけではありません。相互に連関しているものだと思います。人権的な状況というのは貧困のない状況ですから、開発を通じて人権的な状況を作っていくということで関わっているわけです。

社会はいろいろなことにお金を使うわけですが、そのなかで教育が有効な投資先であるという考え方は、人権的なアプローチとは少し違った考え方だと言えると思います。例えば、私が短期間勤務していた世界銀行という機関がワシントンにありますが、ほかにもマニラにアジア開発銀行があったり、地域ごとに国際開発金融機関があって、日本にも国際協力銀行という国際協力のための銀行があります。こういったところでは、教育が人権だという考え方はもちろんあるわけですが、教育は有効な投資であるとして、開発アプローチで投資を行うわけです。例えば世界銀行の経済学者たちの試算によると、インフラ――道路とか電力プラントの建設等――に比べても、教育への投資は高い収益率があるということが繰り返し分かっているわけです。投資家としても、教育は大きな良い投資先なのだということで、国際社会が教育に取り組む。そして貧困をなくしていくという考え方です。

今申し上げた開発アプローチと人権アプローチは、教育開発に携わる人間がそのどちらかを選ぶということではなく、常にどちらも意識して進めていくのが望ましいアプローチですが、もう一つ、国際社会が途上国だけ

ではなく世界の教育を見るときに、非常に重要なアプローチがあります。それは平和へのアプローチだと思います。2001年9月11日に、皆さんはどこにいらしたか覚えていますか。5年前ですから、皆さんは中学生ぐらいだと思います。でも、その日のことを覚えている方は多いと思います。その日にテレビを通じて目にしたアメリカの世界貿易センタービルの倒壊は強く記憶に残っていて、それをどこで目にしたかを世界中で多くの人が覚えているわけです。私はそのとき、ワシントンにおりました。ニューヨークでなくて幸いだったのですが。ワシントンの米州開発銀行の会議に参加して、その後イギリスに行く予定にしていたのですが、ワシントンのペンタゴンに飛行機が1機突っ込んでいるということで、本当にワシントンというかアメリカ中がパニックになってしまって、空港は閉鎖されて、1週間ワシントンに缶詰になった覚えがあります。その異常な状態のなかで、しばらくぶりの休暇というか足止めをくらったわけですが、そのとき、いろいろなことを考えました。たぶんあのときには世界でいろんな人たちが、自分の仕事と今起きていることとどんな関係があるだろうと考えたと思います。ワシントンというのはそういうことを考える人たちがたくさんいる所だと思うのですが、世界銀行の人たちはいつも途上国の人たちから恨まれていますから、次にテロに襲われるのは世界銀行ではないかと怖がっていたものです。あんなことがあって、ワシントンのいろいろなNGOや国際機関、特に教育開発に携わっている人たちと、仕事など手につかずに毎日議論して過ごした覚えがあります。

そのとき、すごく当たり前のこと、つまり国際社会という立場で――途上国だけではないけれども――教育というものを見ていくときに、最も大切なアプローチを私たちは忘れていたのではないかと気がついたのです。それは戦後にユネスコが作られたときの憲章の、前文の最初の文章です。これはぜひ皆さんに覚えておいていただきたいのですが、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」という精神、つまり教育はまさに平和の砦を心のなかに築くためにあるということです。後でも申し上げますが、もちろん教育にはたくさんの

目的があるけれども――人権にも開発にも大きな役割があるわけですが――やはり平和の砦を築くために、国際もしくは異文化間で理解をするために、教育がある。それを国際社会が作っていくという観点がとても重要ではないかと思います。

　また教育は、民主主義の観点からも見ることができます。例えば投票するときに、字が書けない、読めない人がどうやって投票するのか。実際に途上国のなかには、写真に投票できるシステムの国もあるのですが、それでは本当の意味で民主主義に参加していることにはならないかもしれません。候補者が本当に自分たちのための政治をしてくれるかどうかをどうやって判断するのか。それにはやはり字が読める、書ける状態が必要だと思います。またいろいろな民族が存在している国においては、国民を統合していくのが重要な政策なり目標です。そのためにも、教育が必要です。それから社会的な公正を実現していく。つまり皆がお父さんの仕事を、世代を超えて継いでいかなくてはいけないのではなくて、自分の能力や希望や価値観に合わせて職業の選択をすることも、教育システムを充実させることによって可能にしていく。そして、これは最も根源的ですが、文化を伝承するために教育が必要だという考え方もあります。

　教育には、いろいろな目標があるわけです。ただ残念ながら、教育が無色透明なもので、教育の量を拡大していけば、社会的な様々な状況が良い方向にどんどん進んでいくという話ではないのです。教育というのは民主主義にも貢献するかもしれませんが、反対に例えばナチズムとか、ほかに戦後にも反民主主義的な動きがありましたが、そういったものも教育を利用して大きくなっていったという側面があります。ですから、必ず民主主義に貢献できるかというとそうではなくて、反対の方向にも教育が使われてしまうことがあるわけです。民族がそれぞれ他の民族と対立し、離れていく方向にも教育は使われてしまう可能性があります。また、社会的な公正と言いましたが、例えばお金を使えばいい大学に行けるような教育システムを作ってしまうと、これはまさに階級の再生産と言いますか、豊かな人が豊かなままでいるために教育システムが機能してしまう。文化の伝承

のために教育が必要だと言いましたが、文化を破壊するときにも教育はたくさん使われてきました。つまり、全てにおいて教育は諸刃の剣なのです。教育の量を拡大するだけではなく、教育の内容、教育のシステムをいかにデザインしていくか、ということが、重要なのだと思います。教育という、非常に価値があるけれども危ない部分をどうやっていくかということも考えなければならないのです。

1950、60年代には特に多くの植民地が独立したわけですが、そういうなかで国際社会が一緒になって途上国の教育を促進していこうというので、いろいろ議論されてきました。特にその時代はユネスコの役割も大きく、50年代、60年代の国際社会は、ユネスコを中心として80年代ぐらいまでにはなんとか国際目標として初等教育の完全普及ができるのではないかと思って、そういう政策目標を80年に向けて立てたわけです。ところがそれは、全然達成できませんでした。90年にもう一度仕切りなおした形で、「万人のための教育世界会議」という国際会議が行われました。これは開催されたタイのジョムティエンというリゾート地の名前をとって「ジョムティエン会議」とも言いますが、教育分野にいる人間にとってみると、「ジョムティエンの前と後」という言い方をするぐらい大きなインパクトがあった会議です。ここでは、基礎教育を世界に普及していかないといけないということが議論されて、それが合意されたわけです。そのときの目標年は2000年でした。1990年に、あと10年でそれをやろうと言って、政策目標が立てられたわけですが、残念ながらまったくそれは実現しなかった。2000年には「世界教育フォーラム」（ダカールで開催）という会議がありました。また、世界的には良く知られているのに、残念ながら日本ではあまり知られていない「国連ミレニアムサミット」（ニューヨーク開催）という会議があって、ニューヨークに世界の指導者が集まって、ミレニアム開発目標というのを採択したわけです。この二つの会議では、初等教育の完全普及を2015年までに達成するという目標が入っています。しかし、これが本当に達成できるのか。いや難しい状況です。つまり、初等教育の普遍化という目標は、これまでどんどん先延ばしにしてきたわけです。はじめは「1980年」と言っ

て、それができなくて90年に「2000年」、そして「2015年」と言ってきている。結局、ずっとできないままでいます。もちろん、少しずつ進展はしてきているのですが、2015年に完全に初等教育の普及ができるのかどうか。これは残念ながら悲観的予測をしている人が多いのですが、なんとかしないといけないと思っています。

国際社会では、基礎教育の重視——これから、とにかく基礎教育を全ての人たちに——ということが、いちばん大きな方向性としてあるわけです。また、そのためには女児とか障害児、少数民族など、社会的な立場のなかで教育を受けにくい人たちに対して、どのように教育サービスを提供していくかが問われています。例えば世界の非識字者のなかで女性の占める割合は5割以上、つまり女性のほうがずっと非識字者が多いのですが、男の子は学校に行かせても女の子は行かせないという家があったり文化があったりするわけです。そういうところに対して、どうやっていくか。障害児についても、私はこの夏にスリランカで障害児教育の調査をしてきましたが、本当に多くの障害児が学校に行けていない。特に肢体不自由の子どもは、学校に行く術がない状態でいることが多いわけです。少数民族も、例えば親が話す言葉が学校で教えられる言葉と全然違ってしまうと、学校に行っていても何を言っているのか分からなくて、中退してしまうということが起きてしまいます。そういった社会的弱者の教育振興をどうしていくか、これからの大きな問題です。

もう一つ、教育の質という問題です。これまで、全ての人に教育をということで量については言っているのですが、そこに質についての議論がないと、何の役にも立たないのではないかということに最近気づき始めました。つまり、学校に行ってもそこで学習をしなければ何の意味もないどころか、これは非常に大きな犯罪だということです。例えばマラウィという小さな国をご存じでしょうか。そこでは比較的早く、1990年代の初めに初等教育の無償化を行い、多くの子どもたちを学校に入れることができたのですが、しばらくして見ていると、5、6年経っても、2、3割の子どもたちが字を読めず書くこともできない。つまり学校に行って5年も6年も経つの

に、読み書きの全然できない子どもたちが2割以上もいるようなシステムを作ってしまったわけです。質の低いシステムです。

こういう状況で何がいけないかというと、学校に行くために親も子どももいろいろな犠牲を払っていることです。例えば無償の学校教育であっても、学校に行くためには、家庭や地域社会で、子どもたちが自分の親や地域の人から教えてもらっていたインフォーマルな教育機会を犠牲にして学校に行っているわけです。学校に行けば、もっと生産的で有用な教育を受けられる。だからこそ学校に行く意味があるにもかかわらず、学校できちんとした教育を何も受けてないということになれば、これは社会の犯罪、つまりただ学校に子どもを収容するだけで学ばせないという罪を犯している状況になるわけです。ですから、教育の質はとても重要なことだと思います。

基礎教育のことばかり言ってきましたが、もちろん高等教育や職業訓練も非常に重要な部分ではあるのです。でも、これについてお話しすると長くなるので省略しますが、高等教育は一方でいろいろな非効率が指摘され、批判があります。ですが、1990年代の後半から途上国においても情報通信技術（ICT）の革命が起きていて、知識基盤経済というのが大きくなっていますので、高等教育についても必要になってきています。

教育において、世界的な潮流はたくさんあるわけですが、特に社会的な弱者への教育、それから量だけでなく教育の質ということを考えていかなければならないと思います。

堅い話になってしまいましたが、私はこの夏に、スリランカの学校で、障害児学級の調査をしてきました。途上国のなかでは、スリランカは福祉国家というか、政権が社会的なファクターにずっと重きをおいて障害児教育を整えてきたところだと思います。そういう意味で感心させられることが多かったのですが、家庭に行ってみると、学校に行けない子どもたちの状況は深刻だと感じました。また、ケニアのマサイ族――赤い衣装を着て跳んでいるようなコマーシャルがありますが――の学校でも、今年の夏、泊り込みで調査をしてきました。スリランカでもケニアでも私は感じたので

すが、とにかく頑張って、子どもたちに意味のある教育を提供しようとしている先生や行政官の人たちが、必ずいらっしゃるのです。そういう方々と一緒にこの夏いろいろなことを議論することができて、とても幸せでした。少しだけご紹介しました。

どうもありがとうございました。

講演2

教育協力におけるNGOの活動

伊藤　解子*

今日は非政府組織（NGO）が行う教育協力活動を題材にお話ししたいと思いますが、このなかでNGOに関わったことがある方、いらっしゃいますか。ボランティア活動をするだけでなく、報告会に行ったことがあるとか、インターネットで見たことがあるという方、どれぐらいいらっしゃいますか。何人かいらっしゃいますね。いま現在、日本にはすごく多くのNGOがあって、300団体以上あります。そのうち教育協力に関わっている団体は、保健衛生とか農村開発という分野でも例えば保健教育ということで教育に関わっていることもあるため多いです。そのなかで私たちの団体、シャンティ国際ボランティア会（SVA）は、教育文化の活動を主体に活動しています。今日は私たちの活動を中心に、現地で何が起こっているか、どういうことを私たちができるのかといったことについてお話しさせていただきたいと思います。

活動内容は多岐にわたります。例えば現在、タイ、ラオス、カンボジアで学校建設をしたり、奨学金活動をしていますが、今日は特に緊急時の活動ということで自然災害が起こった後の教育活動、そしてまた紛争が起こった後の難民キャンプでの活動についてお話しさせていただきます。

シャンティ国際ボランティア会が活動を始めたのは1979年で、皆さんは

＊伊藤解子氏　いとう・ときこ：社団法人シャンティ国際ボランティア会　海外事業・企画調査課（企画調査・緊急救援担当）（Tokiko Ito: Emergency Relief & Research Officer, Overseas Program and Research Division, Tokyo Office, Shanti Volunteer Association）

1993年中央大学経済学部卒業。英国リーズ大学大学院修士課程、英国ロンドン大学東洋アフリカ学院大学院修士課程修了。99年社団法人シャンティ国際ボランティア会に入職、教育開発の分野で幅広く活動、現在に至る。2005年から教育協力NGOネットワーク事務局次長。広島大学教育開発国際協力研究センター客員研究員。共著に「教育と開発リサーチペーパーシリーズ」（シャンティ国際ボランティア会編）。

まだ生まれていなかったと思います。カンボジアの内戦、またラオス国内の内戦により、多くの難民がタイに逃げました。そのときタイ国内に多くの難民キャンプができました。日本国内でもそれが話題を集め、私自身はまだ意識していたという年齢ではなかったのですが、多くのNGOが海外に出ました。日本のNGOにより海外での活動が広く行われ始めたのがこの時期です。最近、パキスタンで地震があったりレバノンで空爆があったとき報道されましたので、多くの団体が現地に入っているのは皆さんも目にしたことがあると思いますが、大きな国際機関のユニセフとか、国際的な大きなNGOが直後にキャンプの中に入って、衣食住について支援をしています。実際に、79年に多くの団体がタイに行ったとき、難民キャンプでは、着の身着のままで逃げてきた人たちに洋服をあげたり、食べるものを配付したり、シェルターをあげるといった活動は行われていました。そこで私たちが何ができるか考え、図書館活動というところに目をつけ、その後現在までの私たちの活動のきっかけになりました。

なぜ図書館だったのかというと、現在も途上国では多くの子どもたちが学校に行けていないという状況ですが、キャンプの中では学校教育のような教育サービスが、国際機関などを中心に行われているのです。でも、キャンプの中にいてもそれを受けられない子どもたちがいたり、キャンプから外に出られないので学校から帰宅したときにやることがない。またキャンプの生活が長期化するなかで、いつ自分の国に帰れるのか分からない。そういった子どもが多くいました。そこで私の会の先輩たちは、そのままキャンプの中で生活し続ける可能性がある子どもたちのための活動として、例えばカンボジア難民のキャンプでは、カンボジアの言語であるクメール語の図書を国境地帯からかき集めて図書館を作って子どもたちに開放したり、キャンプ内の学校に絵本を配布したりといった活動を行ったわけです。

では、なぜNGOが活動するのかということですが、衣食住の支援は大きな団体がすでにやっているというなかで、私たちはその間の、何か届いていないところに入っていこうという考えがいちばんの理由かと思います。「草の根の支援」という言葉を聞かれたことがあると思います。この言葉は、

国際協力を学ぶ上でよく聞かれると思いますが、草の根は大地に張りついているということでもないですが、上流階級や教育を受ける機会が備わっている環境の人ではなく、虐げられている人や底辺の人たち、支援が届いていない場所に着眼して活動している、これがNGOの活動の特徴です。紛争地、また地震が起こった後の自然災害地などでも同じようにして入っていきます。

では何が問題かということで、教育に視点を当てようかと思ったのですが、すでに黒田先生がとても分かりやすく説明してくださったので、あまり深くは入りません。学校側にも先生がいないとか、質のいい教育を受けさせてあげることのできないいろいろな理由、条件があるのです。また家庭側にも、学費が払えない、親が子どもを学校に行かせてしまったら家の仕事を手伝ってもらえないため行かせない、といった事情があります。そこで、学校に行かない、行けない子どもたちがそのまま育ってしまう。特に、紛争後の難民キャンプであったり——難民キャンプでなくても国内で留まる国内避難民キャンプも多いですが——また自然災害後などの緊急時は、とにかく食べることや安全に住めるシェルターなどが重視されるなかで、教育の機会が失われてしまう子どもがとても多いのです。ですから、緊急時にでも、教育が必要だという着眼点を持ってやっていくことが重要だと考えています。

次に、どうやって私たちが活動を行っているかをお話しします。私たちの団体は、「教育・伝統文化支援活動」ということで、活動のきっかけが図書館活動だったこともあって、今もその活動を中心にやっています。図書館というと、日本で育った多くの方は小学校の図書館とか、地域の区立・市立図書館といった、大きな建物の中に蔵書がたくさんあって、自分の読みたい経済学の本とか子どもの本があるのを想像すると思いますが、途上国では教科書さえ、自分一人で持つことができない状況が多くあります。そこで私たちは絵本を子ども向けに出版したり、それを配布したり、図書館員の先生の教育研修も行っています。また学校建設とか、スラムの子どもへのコミュニティ図書館や少数民族の子どもたちを学校に行かせるための

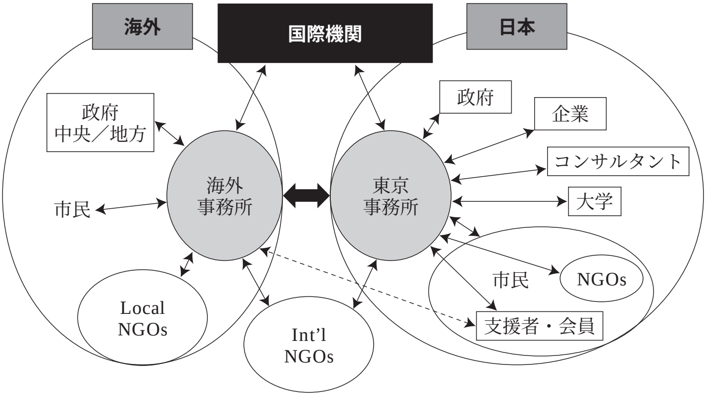
奨学金活動などの方法でも、教育支援を行っています。

これらの個々の活動を紹介しますと、「現場に入って活動しているんですね。まさにボランティア活動ですね」と言われるのですが、実際に現場で活動するということの反面を広く考えたときに、「何に向かっているのか」をいつも忘れてはいけないと考えています。何をやっているのかを忘れてしまったり、例えば自分が好きな現場に行って友だちを作って一緒に働くこと自体が目的になってしまうような人も往々にしていますが、特にNGO活動というのは現場型なので、私たち外部の人間がそこで、直接中に入って教育に携わるという重さを考えるといつも何に向かっているのかを肝に銘じておかないといけないと思っています。

先ほど黒田先生がおっしゃっていたことにも関わるのですが、人権、子どもたちが生きていくための力、そして経済復興の中に教育の役割があると思います。子どもに教育の機会を与えることにより、子どもたちが自分の民族とか自分の国に自尊心を持ち、そして平和な社会を築いていくようになることを願ってやっていくことかと思います。それは国際的な流れとして、先生にも触れていただいた「万人のための教育」そして「国連ミレニアム開発目標」といった動きのなかで、世界中で取り組んでいることです。NGOの活動もこうした世界の動きの枠組みに合わせて、目標をもって活動を行っていくことが必要だと感じています。

さて、今日は、ユニセフの平林さんとも一緒に出させていただいたのですが、私たちの会の組織関係図（図1）を見ていただくと、私たちのような一つの小さい団体が、実に多くの機関とか関係者と関わりながら一つの事業をやっていることが分かると思います。例えば日本国内を見てみますと、私たちの団体の東京事務所では、政府の助成金をもらったり――ODAで各国にどういった政策の支援をしているかも関わってきますし――企業からも資金をもらっていたりして関係を築いています。他に、国内では、開発コンサルタントの人たちがいて、政府のODA事業の途上国での実施などをしています。ときには共同で調査を行うことがあります。また、大学の先生などに専門的な知識についてアドバイスをいただいたり、意見交換を行

図１　SVAの活動　組織関係図



ったり。市民というのは日本の市民の方々、他のNGOもいますし、私たちの団体を支えてくださっている支援者、会員の方々もいます。国際NGO（いろいろな国で活動を展開しているNGO）と、意見交換、情報交換をしていますし、ユニセフ、ユネスコといった教育関係の機関、アジア開発銀行、世界銀行などの国際機関とも情報交換や事業資金受託などで関わっています。また海外事務所では、現地の政府とか市民、現地で設立された現地NGOなど、多くの人たちと関わって一つの事業を進めています。ということで、NGOというのは個々でやっているようでありながら、すごく多くの人たちと情報交換をしながら活動しているということを、説明させていただきました。

私がつい最近関わった事業から、現場の話をさせていただきたいと思います。昨年10月8日にパキスタンで起こった地震についての救援活動です。地震の発生した時間がちょうど学校が始まった直後だったので、多くの子どもが学校の校舎の倒壊で怪我をしたり亡くなったりしました。前任者に代わり、私は半年後に現場に入ったのですが、ちょうど怪我をした子どもが退院してきて、松葉杖をつきながらも学校に戻ってきている状況でした。多くの学校は、校舎が崩れてしまった後、多くの国際機関の支援で、テントで教室を作り勉強していました。夏になると気温が日中40度を超えるの

で、テントの中は暑く、外に出て勉強している様子が多く見られました。

そこで私たちの団体が行ったのは、図書館兼教室として使えるシェルターの建設でした。これはすごく小さいものですが、緊急時ということでもわりとしっかりしたものを造りました（写真1）。とにかく子どもたちが一日も早く学校で勉強出来るように、そういうことを目的にして、簡易式のものを造りました。簡易式と言っても、この先10年以上はそれを使っていくのではないかと思われるほど、まだ校舎の再建は進んでいません。

崩れる心配のない校舎で安全に勉強出来るように空間を作り、そこでお絵描きをしたり、皆で絵本を読みあったりできるスペースを作りました（写真2)。シェルターの中は先ほども言いましたが、図書館活動を中心にしていましたので、子どもたちが読める絵本の配布などを行いましたが、例えば図書を配ったら、すぐに子どもが読みはじめたり、先生が皆にどんどん読ませたりするかというとそうではなくて、先生など、人が導いてあげることが必要です。こういうふうに絵本を読むのだと言っても、字が読めない子どもは興味を持ちません。そこでまず読み聞かせをしてあげて、子どもたちに関心を持ってもらったり、また絵を描いてみせて子どもたちと話し合ったり、憶えたお話を子どもたちが家に帰って家族に話をしてあげる

写真1

完成したシェルターと子どもたち

写真２

シェルターでの図書活動

よう促したり、ということから始めないといけないわけです。こうした活動の効果は、先生から子どもたちへのアプローチに懸かっていることが経験からわかっていますので、図書館活動に関して、先生の研修も行い、先生が子どもたちに読み聞かせをしたり、校庭でゲームをしたり、そういったことで図書館活動を継続してもらう形にしました。図書館のスペースと先生と図書を揃えて、多くの子どもたちが学校に来て絵本を読んで識字力を高め、読む力だけではなくて先生のお話を聞くことで聞く力、そして書く力、先生とやり取りをしながら話す力がついていく。学力だけでなくコミュニケーション能力もつけていく。先生との話のなかで自分たちの知識を高めていく、そういう形の教育を目指した事業を行いました。

今から、難民キャンプでの私たちの活動についてビデオをご覧いただきたいと思います。こちらは団体紹介ビデオですので、途中でご支援のお願いのような部分が入ってしまうのですが、NGO では、資金調達はとても重要な仕事です。東京事務所の職員は日々、教育のことを考えながらも資金調達に追われています。このビデオは、映像は全てスタッフが撮影しており、もちろん編集はプロの方にしていただいたのですが、構成等は全て、私

たちで行いました。

〔ビデオ〕

こちらはミャンマー難民キャンプにある図書館です。子どもたち、とても嬉しそうですね。ミャンマー国内では、少数民族のカレン族と軍事勢力との間の紛争が50年以上も続いています。多くの人々が家が焼き討ちにあったり、強制労働を強いられてきています。これまで100万人以上が家を離れ、国内避難民が拡大しています。子どもたちの教育の機会をはじめ、家族を失ったことにより、多くの子どもたちが大人の犠牲になっています。現在、ミャンマーの隣にあるタイでは15万人の人々が難民として逃れ、10の難民キャンプで生活しています。難民の数は、毎年1万人ずつ増えています。

マレワちゃん、10歳。難民キャンプでは、食料や家屋、学校や病院など、生活に必要な基本的なものは提供されていますが、電気がありません。また、キャンプの外に出て働くことは禁じられています。学校が終わったら家の手伝いか、きょうだいの面倒をみます。難民キャンプの子どもが抱えている問題は、大きく二つあります。一つは、有効に余暇の時間を過ごすことができないこと。もう一つは、学校には本や教材が不足しており、情報や知識を得る機会が極端に少ないことです。彼女は学校が終わると、図書館にやってきます。ここには母語であるカレン語と公用語であるビルマ語の絵本があり、図書館では図書館員が読み聞かせをしてくれたり、折り紙や絵画、ゲームなどをして遊びます。

絵本はマレワちゃんにとって、心の栄養となっています。知識や読み書きの道具に使われるだけでなく、感性や想像力、友達や家族を思いやる心を深めます。また、内戦で傷ついた心を癒す効果もあります。

シャンティ国際ボランティア会は1980年に設立以来、アジア地域で子どもたちに絵本を手渡す活動を行ってきました。現在、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー難民キャンプ、アフガニスタンで図書館活動を行っています。これらの国々や地域では、絵本が不足しているため、絵本を作るところからこの活動は始まります。普遍的な価値のある絵本を現地の言葉に翻訳し、1ページずつ、訳を貼りつけて絵本を作ります。2004年までに、カンボジアとラオスに5万8,700冊を贈りました。日本から本を贈るだけでなく、絵本作家養成の研修を行い、現地での出版も行っています。カンボジアでは地元の民話を元にした絵本や紙芝居をこれまでに96タイトル出版、ラオスでは30タイトル出版し、さらに150冊の本を箱に詰めた図書箱を1,500の小学校に配布しました。ミャンマー難民キャンプでは、図書館を七つのキャンプに22館設置しました。さらにこの活動で重要なのは、図書館員の存在です。学校や図書館に絵本を配布するだけでは、絵本は有効に活用されません。図書館員が読み聞かせをすることで、子どもは絵本に関心を持ち、絵本の世界に入っていきます。そして自分で本を読もうとする意欲を高めるのです。だからこそ私たちシャンティ国際ボランティア会は、図書館員の育成にも力を入れているのです。

このような図書館活動は、子どもの発達にどのような効果があるのでしょうか。ミャンマー難民キャンプの例です。図書館が難民キャンプに開館してから、6ヵ月後に

子どもの変化を学校の先生や保護者にアンケートした結果、知識、技能、価値や態度の面で実によい変化が見られています。図書館活動は、2005年12月に発生したスマトラ沖大津波で被災した方たちが集まるタイの避難所でも行われています。家族を失った子どもたちの心のケア、ストレス解消のためにも、図書館活動は役立っています。タイ国内では、年間に280回に及ぶ児童図書館活動を行っています。

（中略）

＊ミャンマー難民キャンプの子ども、エブルトゥ君（10歳）が書いた詩

「図書館ができた」

図書館ができた　図書館ができた
ぼくは今、とても幸せだ
ぼくは毎日、学校に行かなきゃならない
なかにはとてもむずかしい授業もある
先生にはときどき叱られるし
叩かれることもある
学校に穴のあいた服を着ていって、友達に笑われることもあるし
外で遊んでばかりいると、両親にも叱られる
でも、今は図書館ができた
叱られたって、図書館に行って本を読んでいるうちに気が晴れる
図書館の本はぼくを叱ったりしないし、穴があいている服を着ていたって
ぼくを笑ったりもしない
とにかくぼくの気持ちを満たしてくれる
こんな図書館がぼくは大好きだ

一つのNGOの活動の紹介でした。ありがとうございます。

講演３

ユニセフと女子教育

平林　国彦*

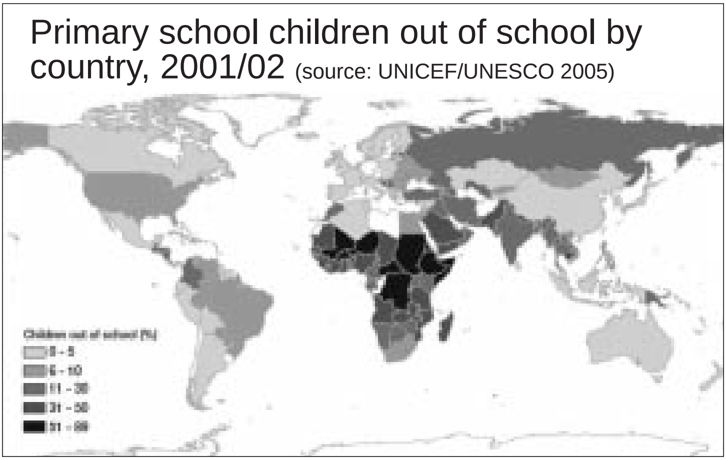
今日は若い皆さんがいらっしゃるということを聞いて、お話しできることを楽しみにしてまいりました。私は心臓外科医で、10年ほど病院などで医療に従事し、その後、国際保健の分野に入りました。なぜ心臓外科をやっていてこういう分野に入ったのか、そのことは最後にまたお話ししたいと思います。

ユニセフというのは、UNICEF: United Nation Children's Fund「世界児童基金」と言います。子どものための機関だということは分かると思うのですが、では何をやっているのかというと、スタッフには、私のような医者や、教育をやっている人、エンジニアもいます。井戸を掘っている人もいます。法律家もいるという、いろんな職種の人が働いている組織です。もともとは第二次世界大戦後、子どもたちへの緊急対応のためにできた組織です。

今、世界では１億1,500万人の子どもが学校に行けていません。これは日本の人口と同じ数字です。世界の子どもで５人に１人は学校に行っていない計算になりますが、特にアフガニスタンやウズベキスタンなど南アジアやアフリカ諸国で、子どもが学校に行けていない（図１参照）。その１億1,500万人のうちの53％にあたる6,200万人……この数字は何でしょう。分かる

＊平林国彦氏　ひらばやし・くにひこ：ユニセフ東京事務所次席代表（Kunihiko Chris Hirabayashi: Senior Programme Officer, UNICEF Tokyo）
1958年生まれ。筑波大学医学専門学群卒業。筑波大学大学院博士課程修了、医学博士。筑波大学付属病院、神奈川県立こども医療センター、茨城県立子供病院などに臨床医として勤務、主に小児心臓外科の領域を専門とする。約10年間、国立国際医療センターの医師としてインドネシア、ボリビアなどに派遣、JICA専門家としても活動する。2003年からユニセフ・アフガニスタン事務所（保健・栄養部部長）、レバノン事務所（同、緊急プログラム担当）、06年から現職。

図1



人はいますか?6,200万人というのは、学校に行けていない女の子の数なのです。1億1,500万人のうち、女の子が6,200万人、学校に行っていません。

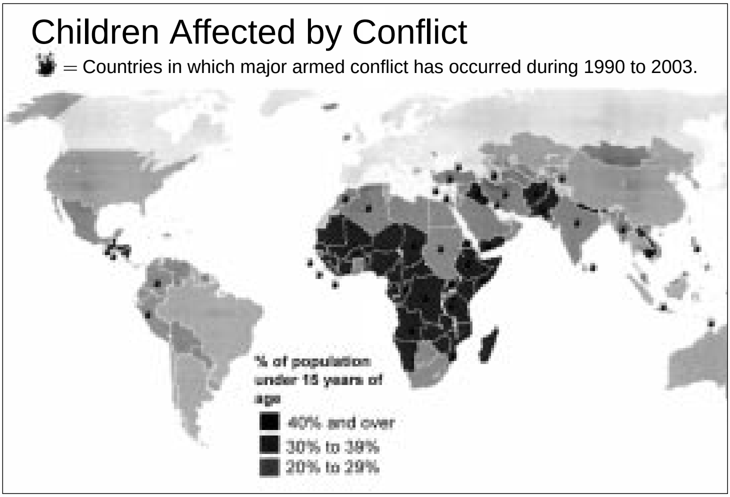
我々ユニセフは、特に女子の教育のことを問題にしたいと思います。私は2人の娘の父親ですが、皆さんと同じぐらいで、上の子は18歳です。たまたま日本は今、女の子は男の子と同じくらい学校に行っていますが、特に中東諸国、南アジア、西と中央のアフリカでは女の子の多くは学校に行っていない。そしてアフガニスタンの例で言いますと、学校に行っていない女の子は例えばカーペットを編んでいる。なぜ子どもがカーペットを編むのか。それは子どものほうが手が器用だからとよく言われます。「子どもは手が器用だから、いいカーペットができるんだよ。だから子どもがやったほうが、お金がいっぱい入る」と。これは正しいと思いますか。私は嘘だと思います。ほとんどのいいカーペットは、熟練した女性が長い年月をかけて作っているのです。なぜ子どもにやらせるかというと、安いからです。賃金が安いから子どもを雇うのです。特に女の子は、そういう対象になりやすく、アフガニスタンなどでは、そういうあやまった考えのもとに子どもが学校に行けない状態が続いています。

アフガニスタンの女の子の学校に行けない確率は、男の子の2倍です。特に南のカンダハールなどでは、本当に多くの女の子は学校に行けていない。今はちょっと改善されていますが。先ほど黒田先生は「教育は人権だ」とおっしゃいました。女の子は学校に行けなくていいのでしょうか。私の母親の時代は、経済的理由でそういうこともあったようですが、今の世の中、特に初等教育はほとんどの国では無料になってきています。なぜ女の子は学校に行けないのでしょうか。それにはいろいろな理由がありますが、実際に学校に行けない子どもたちを見てみると、母親が教育を受けていないことが多いのです。小学校に行っていない子どもの母親の75％が、十分な教育を受けていないことが分かりました。教育を受けていない母親たちの子どもは、教育を受けている母親の子どもと比べて、2倍学校に行けていない。母親が教育を受けていないと、特に女の子は学校に行けない。ということは、いつまでもこの連鎖は止まらないわけです。もう一度言いますが、中東と北アフリカ、西と中央アフリカ、南アジアの国々では特に、母親が教育を受けていないと学校に行っていない子どもが多い。だから、女性の教育をしないと子どもが教育を受けられないという世界的事実があるのです。

私は今まで、いろいろな国で働いてまいりました。日本では主に大学病院や子供病院にいたのですが、その後中央アメリカに行って、南アフリカ、インドネシア、アフガニスタンに3年、レバノンの戦争の間はずっといました。特に戦争のある国――この13年でどういう国に戦争が起きたかを、黒いドットで示していますが（図2）――は、実は子どもが多い国なのです。ということは、戦争は子どもが多い所に起こっている。いろいろな意味で子どもが被害に遇っているということです。教育はその一つです。確かに、学校に行けていない子どもが多い所、教育の悪い所に戦争が起こっています。

しかし、私が見てきたのはそれだけではない、ちょっと違います。例えば戦争で、子どもが実際に被害に遇って、死んでいる。だいたい今の戦争で死ぬのは、子どもと女の人です。制服を着た人が死んでいるのではない。

図2



（出所） UNICEF 2006.

5、6割が非戦闘員で、特に子どもは犠牲者の約40％にもなります。また傷を負った多くの子どもたちがいました。でも体だけが傷ついているわけではないのです。戦争の場合は、災害もそうですが肉親が死にます。レバノンでお母さんが死んだ女の子に会いましたが、そのことで心が傷ついています。

また、お母さんの精神状態が悪くなる。すると、子どもはどうなるか。子どもの情緒が不安定になります。お母さんは特に家族のことを考えます。家族が死んだり、もしくは家が壊れる、お金がないことが心にのしかかってきます。お母さんの精神が不安定になると、それが子どもにも影響します。それだけではないです。大人たちが相手のことを非難する、怒る。するとそれは、子どもに伝播するのです。大人たちの怒りが子どもたちに伝播し、子どもがその怒りを蓄積していると、10年、20年たって、また大きな怒りのサイクルが始まるわけです。だからそういう子どもたちの怒りというものは、非常に気をつけないといけない。悲しみのエネルギーを怒りに変えてはいけないのです。だから教育が必要なのです。教育というのは、子どもたちに正常で安定した環境を与えることができるのです。できれば紛争

の最中でも教育を与える。もし紛争や戦争が起きていればなかなかできないのですが、戦争が終わった次の日からでも教育をやったほうがいい。それはなぜかというと、子どもたちを正常な心に戻すことができるからです。これが教育の一つの大事なところです。

実は、災害、紛争は、特に女の子たちに影響を与えています。一つは、戦争があると学校が中断されます。特に、女の子は学校に行かれない状況になります。女の子が学校に行けないのにはいろいろな理由がありますが、事実として、国内避難民の女の子の10人に1人しか学校に行けていない。それはなぜかというと、危ないので親が行かせない。親が危ないと思う以上に、戦闘員が女の子に性的な暴力をすることもよくあるのです。それから戦闘の間には、早く結婚させたいという感情がよく芽生えるのです。そのほうが安全だからということです。若い人はよく兵隊に行く前に結婚するとか、戦闘の間は強制的な若年結婚などが生まれやすい。アフガニスタンで言いますと、60％以上の結婚が16歳以下です。

また、先ほど申し上げた軍による性的搾取というのがあります。「チャイルド・ソルジャー」という言葉をよく聞きますね。チャイルド・ソルジャーのイメージは、皆さん、どういうものでしょうか。よくテレビに出てくるのは、銃を持った子どもです。あれは本当のチャイルド・ソルジャーですが、そういう人たちは戦争が終わった後、援助の対象になりやすいのです。でも実は、チャイルド・ソルジャー以外にもいろいろ戦争に駆り出されています。男の子ですと、例えばコックになる。食事を作ったり身の回りの世話をしたり、洗濯をしたりします。女の子もそういうことに駆り出されますし、なかには性的な対象になって、兵隊のなかに閉じ込められてしまう。でもその子どもたちは、公的な保護からは見捨てられてしまうのです。

特に女の子はそういうことが起きると、正常な生活になかなか帰ってこられない。それでまた学校に行けなくなる。いろいろプレッシャーがかかってくる。女の子には特にそういう傾向があります。一つは、家庭を助けなくてはいけない。弟たちの面倒をみないといけないというので、よく家

庭労働をする子もいます。また親のなかには、いいと思って子どもを外に出す。実はそれが人身売買だったりするのです。お父さんが兵隊で足を怪我して、歩けなくなる。すると経済的に負担がかかってきます。すると女の子がそれを見かねて労働に出たり、逆に売られたりしてしまう。女の子はそういう対象になりやすい。それから戦争中は、女子の教育への理解が低いというカルチャーもあるのです。先ほどの治安が悪いとか、通学させるのに適切な洋服が手に入らないという理由で、女の子のほうがより学校に行けなくなる。ですから紛争があればあるほど教育の機会に恵まれなくなって、機会に恵まれないがために学校に行きにくくなって、学校に行きにくくなると、家庭に負担をかけまいとしていろいろな被害に遇ってしまう。こういう連鎖になってしまいます。

そればかりではありません。今はアジアの話でしたが、アフリカの話をします。皆さんはアフリカにどんなイメージがあるでしょうか。アフリカは素晴らしい国ですが、残念なことに紛争が多くて、さらにエイズが多いのです。女の子が、よりHIV感染のリスクが高い状況にあります。なぜ学校教育が悪くて紛争が多いとHIV／エイズになりやすいかというと、先ほど言った性的搾取など、暴力とかが起きやすい。また、エイズよりは戦争で死ぬ確率のほうが高いだろうということで、あまりコンドームを使わない。そういうことが起きやすいのです。だから女の子が感染しやすくなる。それから、特に国内避難民などでよくあることですが、女の子たちは、食料を得るために自らの体を提供してお金を取ることも多いのです。アフリカの中には、若い女の子とはセックスをしてもエイズにならないという意味のない迷信があります。だから若い女の子ほど、ターゲットになりやすい。だから戦争になると、女の子は教育も受けられなくて人身売買の可能性もあって、かつエイズにもなりやすいわけです。

私が問いたいのは、これは果たして他人の問題なのか、ということです。ユニセフが学んだことは、女の子たちは教育を受ける機会がより制限されるし、紛争時や災害時は、よりその危険性が増すということです。だから女子教育の問題は感染症や貧困と密接に関連していて、単に教育だけやれ

ばいい、単に感染症だけやればいいというのではなくて、全人的、総合的にアプローチすることが必須です。

このように、特に災害や紛争後は、女の子に対する教育をしなくてはいけないのですが、逆に紛争という不幸を利用することができるのではないか、ということを考えています。なぜかというと、紛争でだいたい壊れてしまいますから、逆にいいものを作る機会になると。だから紛争をネガティブにばかり見ないで、それで平和が始まるのだったら改める機会にしようと。今までは元に戻ればいいと思ったのですが、元に戻したら悪いものがそのまま残ってしまう。だからより良いものにしようと考えています。今いちばん言いたいのは、building back better ということです。どうせ壊れてしまったのなら、もっといいものを作ろう。これが今、特に女子教育にとっては大事だと思います。それから、上から降ろすのではなくて、人々の意見を聞いて、特に若い人や子どもたちがこういう教育に参加していかないといいものはできません。この三つを特に強調したいのです。

では、今我々に何ができるかですが、我々の事務所は、世界中の 160 ぐらいの国と地域にあります。国際機関というのは、日本も含めて世界中にあります。ということは、普遍的なこと、世界的なことができるわけです。しかし、私たちは1人ではできないのです。例えばアカデミックなことは、大学の先生がどういうものが一番有効な方法かを考えることができますし、NGO は草の根でどういうことができるかを考えます。今我々のやっていることは、まずアクセスをよくしようということです。セイフ・アクセス・トウ・スクール（safe access to school）と言いますが、学校を女の子たちの家から安全な距離に、今度造るときにはやり直す。制服をあげたり、女性の先生を増やすこともやっていますし、先ほど申しました教育の質については、先生の教育も非常に大事です。先生の教育というのは、先生に対して、女の子の教育が大事だと、女の子には特別の配慮をしないと学校に来られないと、そういう意識を作って、男女平等を含めて教育をやっていく。それからカリキュラムを改善する。特に教育の質は非常に大事です。

今、教育こそが平和の定着に最も必要だと考えています。なぜかという

と、教育をすると人々の心、特に子どもたちの心が普通に戻りますし、教育についての重要性は誰も文句を言わないです。一時、タリバーンは女性の教育を否定したことがありますが、世界の大人で子どもたちに教育をしたくないという人はほとんどいません。教育というのは、本当にユニバーサルなものなのです。そうするといろいろな人が参加してきて、それが平和の礎になり得る。だから、教育を平和の砦にすることができるわけです。先ほどお話しされた黒田先生も、このような思いでいらっしゃるのではないかと考えます。

さらに私たちは、子どもに優しい教育や学校を作ろうという運動もしています。単にトイレを造るというのではなく、いろいろな視点から13のチェック項目を設けています。それから、紛争や災害があった第一日目から学校がスタートできるように、いつもストックしているスクール・イン・ア・ボックスというものとレクリエーション・キットを、24時間態勢で配布できるようにしています。もし何かあったときには、このボックスを持って行けば、先生の教材からレクリエーション・キットも含め、一切合切入っています。これをワンセット、24時間以内に発送できる態勢をとっています。これが我々のやっていることで、特に災害時、女性に対して行うことが大事だと考えてやっています。

最初にお話ししましたが、1億1,500万人という日本の人口と同じ人数の子どもたちが学校に行けていない。6,200万人という女の子が学校に行けていない。これは他の国の問題なのかということを、私は皆さんに、特に若い人に問いたいのです。先ほどから、いろいろな話を申し上げましたが、こうした私たちの活動は施しなのでしょうか。人を助けるからやるのでしょうか。なぜあなたたちは「国際科」に来たのか。お聞きしたいと思うのですが、あまり明確には答えられないでしょう。私が感じたことを言いますと、これは人を助けるためにやるのではない、施しでもないだろう、これは我々の問題だということです。

最後に、数字にすると非常に難しいので写真をお見せします（次ページ写真）。これは有名な写真ですが、子どもが写っていますね。おそらくアフリ

（出所） Kevin Carter, 1994.

カではないでしょうか。背景に禿鷲が写っています。何を狙っているのでしょうか。子どもを狙っているのでしょうね。子どもは痩せていますか、太っていますか。痩せていますね。お母さんがいますでしょうか。いませんね。こういうことが日常茶飯事で起こっているけれども、実は我々はそれに気づいていないのです。気づいていないということが、果たしていいことなのか。私はこの写真を見て、心臓外科医を辞めてこういう世界に踏み込んだのです。いま少なくとも私が人生の先輩として皆さんに言えることは、1億1,500万人の学校に行けない子どもがいて、6,200万人の女の子が学校に行けていないのは他人のことではなくて、我々の問題ではないかということです。

もっと大事なことは、国際機関ができるとか、JICAができる、世界銀行ができるということではなくて、私たち市民も参加しなくてはいけないということです。国際機関の有意義なところは世界中にあること、NGOは草の根でできる、世界銀行はお金を供出できる、政府は教員を養成したり、カリキュラムを作ることができる。しかし重要なことは、単独で行うのではなく、いろいろなパートナーとやらないといけないということです。なぜこういうことを申し上げるかというと、アフリカや他の国で深刻な問題が起きていれば、日本1国だけが繁栄できることはあり得ないことだからで

す。特にスカンジナビア諸国では、皆そういう意識は強いです。なぜかというと、紛争が起きると難民が増え移民問題になります。経済も駄目になります。要するに他の国が発展しない限り、1国だけで繁栄できるということはあり得ないのです。施しだとか、助けてやるとかいうのではなくて、自分たちが繁栄するためには他の国も繁栄しなくては駄目だ、という意識が必要だと思います。

ユニセフの事務所が東京の南青山にありますので、ぜひ気軽にお立ち寄りください。特に若い人は歓迎します。今日はどうもありがとうございました。